

2022年5月1日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主の晩餐」

聖書：コリントの信徒への手紙一11:17～26

「主の晩餐」は、イエスの十字架と復活の出来事を想起することである。また、イエス・キリストの「十字架」「死」は、私たちに「多くの実を結ぶ」(ヨハネ 12:24)ものためであり、「わたしたちが生きるようになるため」(ヨハネの手紙一 4:9)のものであると聖書は記す。

このイエスによる最後の晩餐の時に共に食事をしたのは、弟子たちであった。弟子たちはこの後、イエスを裏切り、イエスを置いて逃げ去ることをご存知でありながら、イエスは弟子たちと食事を共にする。そして復活後も逃げ去る弟子たちに現れ食事を共にする。この「主の晩餐」には、そういう弟子たちの裏切りも伴いながら、されど弟子たちと共に食事をなさる主イエスがおられる。

「主の晩餐式」は月に一度巡って来る。私たちが感謝に満ち溢れている時だけ巡ってくるわけではない。試練の時も、失敗を犯して自分の罪深さをいやというほど思い知らされている時にも、主の晩餐式は巡ってくることもあろう。そんな時、「こんな私がパンを取っているのだろうか、杯を飲んでいいのだろうか」と思うことがないか。主の晩餐は、決して私たちの側が気持ちで取る、取らないではない。主の定めで主イエスの側から「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われ、「さあ、取って食べなさい」「あなたが今、私を裏切ることを知っている」「あなたが神を見失っていることを知っている」それでも主は、「さあ、取って食べなさい」と言う。そこに気づかされる時、「主の晩餐式」は、私たちの側に悔い改めを起し、感謝と慰めに満ち、希望と勇気が与えられて行くのではないか。

ただ、私どもの普天間バプテスト教会では、バプテスマを受けておられない方は、その晩餐式に預かることはできないとしている。しかし、いつの日か一緒に「主の晩餐式」に預かることが出来ればと心から願う。バプテスマは、何も難しいことではない。ペーパー試験をすとか、聖書を十分理解してからとか、そういうものではない。もし、そうであれば、私も含め、ここに「主の晩餐式」に預かれるものはほぼいないであろう。バプテスマはキリスト者として歩むスタート・ラインに立つことである。是非、バプテスマが与えられることを願ってやまない。

「主の晩餐式」が行われる時、イエス・キリストご自身が、今ここに、この晩餐式に共に居られるということである。(神谷)